論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

甲・乙	氏　名	平林　政人
学　位　論　文　名	Prophylactic Pentazocine Reduces the Incidence of Pruritus After Cesarean Delivery Under Spinal Anesthesia With Opioids: A Prospective Randomized Clinical Trial	
学位論文審査委員	主　査	津本　周作　印
	副　査	佐倉　伸一　印
	副　査	中山　健太郎　印

論文審査の結果の要旨

帝王切開術での脊髄くも膜下オピオイドの投与は一般的であるが、50 - 100% の高い頻度で術後に痒みを生じる。現在脊髄くも膜下オピオイドによる痒みに対して、治療方法や予防方法は確立していない。申請者は帝王切開術後24時間以内のオピオイド誘発性の痒みに対するペンタゾシンの予防的効果を検討した。119 人の待機的帝王切開術を受ける患者を対象とし、ペンタゾシン15 mgと生理食塩水 1 mlの静脈内投与群に群分けをした。両群ともに脊髄くも膜下腔に 0.5% 高比重ブピバカイン 10 mgとフェンタニル 10 μg、モルヒネ 100 μgを投与した。術後 24 時間以内の痒みの発生率を主要評価項目とし、副次評価項目として痒みの生じるまでの時間、術直後、3、6、12、24 時間での痒みの重症度、疼痛の評価 (NRS)、嘔気嘔吐、呼吸抑制の有無を評価した。術後 24 時間以内の痒みの発生頻度はペンタゾシン群で有意に低下した(相対危険度 69%、95% 信頼区間 52 - 90%、P =.007)。痒みの生じるまでの時間はペンタゾシン群で有意に延長し、重症度もペンタゾシン群で有意に低下した。嘔気嘔吐、NRSは両群で差はなかった。本研究の結果より、ペンタゾシン 15 mgの予防的投与が、帝王切開術後の脊髄くも膜下オピオイドによる痒みを抑制し得ることが明らかとなった。これら知見はオピオイド誘発性の痒みに対する予防方法の確立や、今後のガイドライン作成などの際の一助となり、学位授与に値すると判断した。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者らは帝王切開術後24時間以内に生じるオピオイド誘発性の痒みに対するペンタゾシンの予防効果について、二重盲検試験を用いて経時的変化を含めて詳細に検討した。関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。(津本周作)

申請者は、帝王切開術時に脊髄くも膜下麻酔で局所麻酔薬に添加して術後鎮痛を期待して投与されるμオピオイドによって発生する痒みが、κオピオイドのペンタゾシンの静脈内予防投与によって頻度も程度も減少したことを示した。帝王切開術後の痒みは大多数の患者が経験する苦痛であり、本研究結果はその予防法を初めて示したものとして意義深い。関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。(佐倉伸一)

申請者は帝王切開術における脊髄くも膜下麻酔に用いるオピオイドで誘発される痒みに対して、ペンタゾシンの静脈内予防投与が痒み軽減に有効であることを二重盲検試験にて立証した。本研究は臨床的に極めて有意義と考えられ、関連知識も豊富であり学位授与に値すると判断した。(中山健太郎)

(備考) 要旨は、それぞれ４００字程度とする。